太宰治全集

9

筑摩書房

太宰治全集第九巻

昭和四十二年三月七日初版第一刷発行
昭和四十三年十二月五日初版第八刷発行

著者　太宰治

発行者　竹之内静雄

発行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

CS 70009

メリイクリスマス　三
ヴィヨンの妻　一四
母　四四
父　五七
女神　七〇
フオスフオレッセンス　八二
朝　九〇
斜陽　九七
おさん　二四三
犯人　二六〇
饗應夫人　二七四
酒の追憶　二八四

美男子と煙草　二九六
眉山　三〇四
女類　三一七
渡り鳥　三二九
家庭の幸福　三四一
櫻桃　三五四
人間失格　三六三
グッド・バイ　四七一
後記　四九九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

太宰治全集

第九卷

メリイクリスマス

東京は、哀しい活氣を呈してゐた、とさいしよの書き出しの一行に書きしるすといふやうな事になるのではあるまいか、と思つて東京に舞ひ戻つて來たのに、私の眼には、何の事も無い相變らずの「東京生活」のごとくに映つた。

私はそれまで一年三箇月間、津輕の生家で暮し、ことしの十一月の中旬に妻子を引き連れてまた東京に移住して來たのであるが、來て見ると、ほとんどまるで二、三週間の小旅行から歸つて來たみたいの氣持がした。

「久し振りの東京は、よくも無いし、惡くも無いし、この都會の性格は何も變つて居りません。もちろん形而下の變化はありますけれども、形而上の氣質において、この都會は相變らずです。馬鹿は死なないきや、なほらないといふやうな感じです。もう少し、變つてくれてもよい、いや、變るべきだとさへ思はれました。」

と私は田舍の或るひとに書いて送り、さうして、私もやつぱり何の變るところも無く、久留米絣の着流しに二重まはしをひつかけて、ぼんやり東京の街々を歩き廻つてゐた。

十二月のはじめ、私は東京郊外の或る映畫館、（といふよりは、活動小屋といつたはうがぴつたり

するくらゐの可愛らしくお粗末な小屋なのであるが）その映畫館にはひつて、アメリカの寫眞を見て、そこから出たのは、もう午後の六時頃で、東京の街には夕霧が烟のやうに白く充滿して、その霧の中を黑衣の人々がいそがしさうに往來し、もう既にまつたく師走の巷の氣分であつた。東京の生活は、やつぱり少しも變つてゐない。

私は本屋にはひつて、ある有名なユダヤ人の戲曲集を一冊買ひ、それをふところに入れて、ふと入口のはうを見ると、若い女のひとが、鳥の飛び立つ一瞬前のやうな感じで立つて私を見てゐた。口を小さくあけてゐるが、まだ言葉を發しない。

吉か凶か。

昔、追ひまはした事があるが、今では少しもそのひとを好きでない、そんな女のひとと逢ふのは最大の凶である。さうして私には、そんな女がたくさんあるのだ。いや、そんな女ばかりといつてよい。

新宿の、あれ、……あれは困る、しかし、あれかな？

「笠井さん。」女のひとは呟くやうに私の名をいひ、踵をおろして幽かなお辭儀をした。

綠色の帽子をかぶり、帽子の紐を顎で結び、眞赤なレンコオトを着てゐる。見る見るそのひとは若くなつて、まるで十二、三の少女になり、私の思ひ出の中の或る影像とぴつたり重なつて來た。

「シヅエ子ちやん。」

吉だ。

「出よう、出よう。それとも何か、買ひたい雜誌でもあるの？」

「いいえ。アリエルといふご本を買ひに來たのだけれども、もう、いいわ。」

私たちは、師走ちかい東京の街に出た。

「大きくなつたね。わからなかつた。」

やつぱり東京だ。こんな事もある。

私は露店から一袋十圓の南京豆を二袋買ひ、財布をしまつて、少し考へ、また財布を出して、もう一袋買つた。むかし私はこの子のために、いつも何やらお土産を買つて、さうして、この子の母のところへ遊びに行つたものだ。

母は、私と同じとしであつた。さうして、そのひとは、私の思ひ出の女のひとの中で、いまだしぬけに逢つても、私が恐怖困惑せずにすむ極めて稀な、いやいや、唯一、といつてもいいくらゐのひとであつた。それは、なぜであらうか。いま假りに四つの答案を提出してみる。そのひとは所謂貴族の生れで、美貌で病身で、といつてみたところで、そんな條件は、ただキザでうるさいばかりで、れいの「唯一のひと」の資格にはなり得ない。大金持ちの夫と別れて、おちぶれて、わづかの財産で娘と二人でアパート住ひして、と説明してみても、私は女の身の上話には少しも興味を持てないはうで、げんにその大金持ちの夫と別れたのはどんな理由からであるか、わづかの財産とはどんなものだか、まるで何もわかつてやしないのだ。聞いても忘れてしまふのだらう。あんまり女に、からかはれつづけて來たせゐか、女からどんな哀れな身の上話を聞かされても、みんないい加減の嘘のやうな氣がして、一滴の涙も流せなくなつてゐるのだ。つまり私はそのひとが、生れがいいとか、美人だとか、しだいに落ちぶれて可哀さうだとか、そんな謂はばロオマンチックな條件に依つて、れいの「唯一のひと」として擇び擧げてゐたわけでは無かつた。答案は次の四つに盡きる。第一には、綺麗好きな事である。外出から歸ると必ず玄關で手と足とを洗ふ。落ちぶれたといつても、さすがにきちんとした二部屋のアパートにゐたが、いつも隅々まで拭き掃除が行きとどき、殊にも臺所の器具は清潔であつた。第二には、そのひとは少しも私に惚れてゐない事であつた。さう

して私もまた、少しもそのひとに惚れてゐないのである。性慾に就いての、あのどぎまぎした、いやらしくめんだうな、思ひやりだか、自惚れだか、氣を引いてみるとか、ひとり角力とか、何が何やら十年一日どころか千年一日の如き陳腐な男女闘爭をせずともよかつた。私の見たところでは、そのひとは、やはり別れた夫を愛してゐた。さうして、その夫の妻としての誇りを、胸の奥深くにしつかり持つてゐた。第三には、そのひとが私の身の上に敏感な事であつた。私がこの世の事がすべてつまらなくて、たまらなくなつてゐる時に、この頃おさかんのやうですね、などといはれるのは味氣ないものである。そのひとは、私が遊びに行くと、いつでもその時の私の身の上にぴつたり合つた話をした。いつの時代でも本當の事をいつたら殺されますわね、ヨハネでも、キリストでも、さうしてヨハネなんかには復活さへ無いんですからね、といつた事もあつた。日本の生きてゐる作家に就いては一言もいつた事が無かつた。第四には、これが最も重大なところかも知れないが、そのひとのアパートには、いつも酒が豐富にあつた事である。私は別に自分を吝嗇だとも思つてゐないが、しかし、どこの酒場にも借金が溜つて憂鬱な時には、いきほひただで飲ませるところへ足が向くのである。戰爭が永くつづいて、日本にだんだん酒が乏しくなつても、そのひとのアパートを訪れると、必ず何か飲み物があつた。私はそのひとのお孃さんにつまらぬ物をお土産として持つて行つて、さうして、泥醉するまで飲んで來るのである。以上の四つが、なぜそのひとが私にとつて、れいの「唯一のひと」であるかといふ設問の答案なのであるが、それがすなはちお前たち二人の戀愛の形式だつたのではないか、と問ひつめられると、私は、間抜け顏して、さうかも知れぬ、と答へるより他は無い。男女間の親和は全部戀愛であるとするなら、私たちの場合も、そりやさうかも知れないけれど、しかし私は、そのひとに就いて煩悶した事は一度も無いし、またそのひとも、芝居がかつたややこしい事はきらつてゐた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

「お母さんは？　變りないかね。」
「ええ。」
「病氣しないかね。」
「ええ。」
「やつぱり、シヅエ子ちやんと二人でゐるの？」
「ええ。」
「お家は、ちかいの？」
「でも、とつても、きたないところよ。」
「かまはない。さつそくこれから訪問しよう。さうしてお母さんを引つぱり出して、どこかその邊の料理屋で大いに飲まう。」
「ええ。」
女は、次第に元氣が無くなるやうに見えた。さうして歩一歩、おとなびて行くやうに見えた。この子は、母の十八の時の子だといふから、母は私と同じとしの三十八、とすると、……。
私は自惚れた。母に嫉妬するといふ事も、あるに違ひない。私は話頭を轉じた。
「アリエル？」
「それが不思議なのよ。」案にたがはず、いきいきして來る。「もうせんにね、あたしが女學校へあがつたばかりの頃、笠井さんがアパートに遊びにいらして、夏だつたわ、お母さんとのお話の中にしきりにアリエル、アリエルといふ言葉が出て來て、あたし何の事かわからなかつたけど、妙に忘れられなくて、」急におしやべりがつまらなくなつたみたいに、ふうつと語尾を薄くして、それつきり默つてしまつて、しばらく歩いてから、切つて捨てるやうに、「あれは本の名だつたのね。」

私はいよいよ自惚れた。たしかだと思つた。母は私に惚れてはゐなかつたし、私もまた母に色情を感じた事は無かつたが、しかし、この娘とでは、或ひは、と思つた。

母はおちぶれても、おいしいものを食べなければ生きて行かれないといふたちのひとだつたので、對米英戰のはじまる前に、早くも廣島邊のおいしいもののたくさんある土地へ娘と一緒に疎開し、疎開した直後に私は母から繪葉書の短いたよりをもらつたが、當時の私の生活は苦しく、疎開してのんびりしてゐる人に返事など書く氣もせずそのままにしてゐるうちに、私の環境もどんどん變り、たうとう五年間、その母子との消息が絶えてゐたのだ。

さうして今夜、五年振りに、しかも全く思ひがけなく私と逢つて、母のよろこびと子のよろこびと、どちらのほうが大きいのだらう。私にはなぜだか、この子の喜びのほうが母の喜びよりも純粹で深いもののやうに思はれた。果してさうならば、私もいまから自分の所屬を分明にして置く必要がある。母と子とに等分に屬するなどは不可能な事である。今夜から私は、母を裏切つて、この子の仲間にならう。たとひ母から、いやな顏をされたつてかまはない。こひを、しちやつたんだから。

「いつ、こつちへ來たの？」と私はきく。

「十月、去年の。」

「なあんだ、戰爭が終つてすぐぢやないか。もつとも、シヅエ子ちやんのお母さんみたいな、あんなわがままな者には、とても永く田舍で辛抱できねえだらうが。」

私は、やくざな口調になつて、母の惡口をいつた。娘の歡心をかはんがためである。女は、いや、人間は、親子でも互ひに張り合つてゐるものだ。

しかし、娘は笑はなかつた。けなしても、ほめても、母の事をいひ出すのは禁物のごとくに見えた。ひどい嫉妬だ、と私はひとり合點した。

「よく逢へたね。」私は、すかさず話頭を轉ずる。「時間をきめてあの本屋で待ち合せてゐたやうなものだ。」

「本當にねえ。」と、こんどは私の甘い感慨に難なく誘はれた。

私は調子に乘り、

「映畫を見て時間をつぶして、約束の時間のちやうど五分前にあの本屋へ行つて、……」

「映畫を？」

「さう、たまには見るんだ。サアカスの綱渡りの映畫だつたが、藝人が藝人に扮すると、うまいね。どんな下手な役者でも、藝人に扮すると、うめえ味を出しやがる。根が、藝人なのだからね。藝人の悲しさが、無意識のうちに、にじみ出るのだね。」

戀人同士の話題は、やはり映畫に限るやうだ。いやにぴつたりするものだ。

「あれは、あたしも、見たわ。」

「逢つたとたんに、二人のあひだに波が、ざあつと來て、またわかれわかれになるね。あそこも、うめえな。あんな事で、また永遠にわかれわかれになるといふことも、人生には、あるのだからね。」

これくらゐ甘い事も平氣でいへるやうでなくつちや、若い女のひとの戀人にはなれない。

「僕があのもう一分(いつぷん)まへに本屋から出て、それから、あなたがあの本屋へはひつて來たら、僕たちは永遠に、いや少くとも十年間は、逢へなかつたのだ。」

私は今宵の邂逅を出來るだけロオマンチックに煽るやうに努めた。

路は狹く暗く、おまけにぬかるみなどもあつて、私たちは二人ならんで歩く事が出來なくなつた。女が先になつて、私は二重まはしのポケットに兩手をつつ込んでその後に續き、

「もう半丁？　一丁？」とたづねる。

「あの、あたし、一丁つてどれくらゐだか、わからないの。」
私も實は同樣、距離の測量においては不能者なのである。しかし、戀愛に阿呆感は禁物である。
私は、科學者のごとく澄まして、
「百メートルはあるか。」といつた。
「さあ。」
「メートルならば、實感があるだらう。百メートルは、半丁だ。」と敎へて、何だか不安で、ひそかに暗算してみたら、百メートルは約一丁であつた。しかし、私は訂正しなかつた。戀愛に滑稽感は禁物である。
「でも、もうすぐ、そこですわ。」
バラックのひどいアパートであつた。薄暗い廊下をとほり、五つか六つ目の左側の部屋のドアに、陣場といふ貴族の苗字が記されてある。
「陣場さん！」と私は大聲で、部屋の中に呼びかけた。
はあい、とたしかに答へが聞えた。つづいて、ドアのすりガラスに、何か影が動いた。
「やあ、ゐる、ゐる。」と私はいつた。
娘は棒立ちになり、顏に血の氣を失ひ、下唇を醜くゆがめたと思ふと、いきなり泣き出した。
母は廣島の空襲で死んだといふのである。死ぬる間際のうはごとの中に、笠井さんの名も出たといふ。
娘はひとり東京へ歸り、母方の親戚の進步黨代議士、そのひとの法律事務所に勤めてゐるのだといふ。
母が死んだといふ事を、いひそびれて、どうしたらいいか、わからなくて、とにかくここまで案

内して來たのだといふ。
私が母の事をいひ出せば、シヅエ子ちやんが急に沈むのも、それゆゑであつた。嫉妬でも、戀でも無かつた。
私たちは部屋にはひらず、そのまま引返して、驛の近くの盛り場に來た。
母は、うなぎが好きであつた。
私たちは、うなぎ屋の屋臺の、のれんをくぐつた。
「いらつしやいまし。」
客は、立ちんぼの客は私たち二人だけで、屋臺の奥に腰かけて飲んでゐる紳士がひとり。
「大串がよござんすか、小串が？」
「小串を。三人前。」
「へえ、承知しました。」
その若い主人は、江戸つ子らしく見えた。ばたばたと威勢よく七輪をあふぐ。
「お皿を、三人、べつべつにしてくれ。」
「へえ。もうひとかたは？　あとで？」
「三人ゐるぢやないか。」私は笑はずにいつた。
「へ？」
「このひとと、僕とのあひだに、もうひとり、心配さうな顔をしたべつぴんさんが、ゐるぢやねえか。」こんどは私も少し笑つていつた。
若い主人は、私の言葉を何と解したのか、
「や、かなはねえ。」

といつて笑ひ、鉢卷の結び目のところあたりへ片手をやつた。
「これ、あるか。」私は左手で飲む眞似をして見せた。
「極上がございます。いや、さうでもねえか。」
「コップで三つ。」と私はいつた。
小串の皿が三枚、私たちの前に並べられた。私たちは、まんなかの皿はそのままにして、兩端の皿にそれぞれ箸をつけた。やがてなみなみと酒が充たされたコップも三つ、並べられた。
私は端のコップをとつて、ぐいと飲み、
「すけてやらうね。」
と、シヅエ子ちやんにだけ聞えるくらゐの小さい聲で言つて、母のコップをとつて、ぐいと飲み、ふところから先刻買つた南京豆の袋を三つ取り出し、
「今夜は、僕はこれから少し飲むからね、豆でもかじりながら附き合つてくれ。」と、やはり小聲でいつた。
シヅエ子ちやんは首肯き、それつきり私たちは一言も、何も、いはなかつた。
私は默々として四はい五はいと飲みつづけてゐるうちに、屋臺の奥の紳士が、うなぎ屋の主人を相手に、やたらと騷ぎはじめた。實につまらない、不思議なくらゐに下手くそな、まるつきりセンスの無い冗談をいひ、さうしてご本人が最も面白さうに笑ひ、主人もお附き合ひに笑ひ、「トカナントカイツチヤテネ、ソレデスカラネエ、ポオツトシチヤテネエ、リンゴ可愛イヤ、氣持ガワカルトヤツチヤテネエ、ワハハハ、アイツ頭ガイイカラネエ、東京驛ハオレノ家ダト言ツチヤテネエ、マサツチヤテネエ、オレノ妾宅ハ丸ビルダト言ツタラ、コンドハ向ウガマサツチヤテネエ、……」といふ具合ひの何一つ面白くも、可笑しくもない冗談がいつまでも、ペラペラと續き、私は日本の醉客

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.